



TITLE:

雍正時代に於ける學臣制の改革：主として其の任用法を中心として

AUTHOR(S):

荒木, 敏一

CITATION:

荒木, 敏一. 雍正時代に於ける學臣制の改革：主として其の任用法を中心として. 東洋史研究 1959, 18(3): 267-283

ISSUE DATE:

1959-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/148162>

RIGHT:

雍正時代に於ける學臣制の改革

——主として其の任用法を中心として——

荒 木 敏 一

- 一、序——學臣と督撫、學臣と科舉
- 二、順治・康熙時代の學臣任用法
- 三、雍正時代の學臣任用法等の改革

一、序——學臣と督撫、學臣と科舉

巡撫は天子の使する所にして、以て守土する者の養民の善なるや否やを察し、學政（學臣）は天子の使する所にして、以て守土する者の教民の善なるや否やを察す。⁽¹⁾

右は曾國藩が清代學臣の性格をずばりと言つてのけた言葉であるが、清代學臣が常に督撫と對比される欽派の官であつたことは紛れもない事實であつた。唯だ督撫が所謂封疆の大吏として地方公事の最高責任者であつたに對し、

學臣は「職として考校を司り、地方公事はもとより與聞せず」⁽²⁾而して専ら風化を宣揚し人材を振拔する一省の最高責任者であつた。従つて「士林・教官の表率」⁽⁴⁾と呼ばれ、或は「但だ衡文を以て任と爲す」⁽⁵⁾と言われもした。一言にして言えば、學臣最大の特長は「職守最も清要たり」⁽⁶⁾に盡きるのである。

しかし督撫と學臣とでは品級の上で可成りの開きがあつた。即ち

督撫は俱に一二品の大員に係り、各省學政に至りては往往「翰林院」編「修」檢「討」主事等の官より簡放される者有りて品秩稍々小なり⁽⁷⁾

と言われた。清代、編修・檢討はわずかに正七品從七品を

夫々領するに過ぎなかつた。⁽⁸⁾とは言え一方に於ては

學政は官階に論なく、悉く督撫と平行にして、惟だ年終に學政聲名の奏あるのみ。原と互相糾察し、並つて遂に統屬と爲るには非らず⁽⁹⁾

とする見解も行われたのである。茲に謂う平行とは、一般に

品級同等にして彼此皆な管轄の責無し。之を平行と謂う⁽¹⁰⁾と説明される。ところで清代學臣として欽派される官はその原銜の品級を帶するの約束があつたが故に、七品クラスの翰林院編修、檢討の學臣は、一、二品クラスの督撫の風下に立つべき道理なるが、實際は次に述べるが如く、兩者間に互相糾察の關係があつて、その意味からして平行なりとする意見が出たものと思われる。しからば互相糾察の實情は如何と云うに、先ず督撫側は

並びに督撫をして年終に於て學政等の劣蹟有りや無しやを陳奏せしむること一次なり⁽¹¹⁾

と言ひ、或は

直省學政の聲名、該督撫向きに年終に於て考語を出具して密かに陳奏を行い、不公不法及び輿論未だ協わざる者

を偶有せば即ちに應に據實直陳すべし。豈に稍も隱飾有るを容さんや。⁽¹²⁾

と規定されている。一方學臣側は

各省の督撫如し果して貪劣の實蹟及び地方事件の辦理公ならざるもの有らば、學政奏事の責あり。原と其の據實奏聞するを准す⁽¹³⁾

と言ひ、或は

其れ或は該省の大吏、廢弛して職めず、措置方に乖かば原と學政の彈劾を准す⁽¹⁴⁾

と規定されている。これ等に依れば、學臣は一應督撫の風下に立ちながら、若し督撫にして貪劣の行爲等ある時、天子に直陳する責任があつたので、この點、位人臣を極めた督撫に對して、いわゆる「清要官」たる學臣が常に糾察の權限を留保していたことは頗る興味深い。それがあらぬか、嘉慶七年^{一八}〇二給事中陳昌齊の如きは「各省の督撫並びに之を稽查するの人無ければ行止專擅なるを免れ難し」⁽¹⁵⁾との見解のもとに、「請うらくは學政に加うるに稽察の銜を以てし、督撫の遲壓蒙混等の弊に遇わば隨時學奏せしめん」ことを闕下に奏請したことがある。流石にその行き過ぎたる

を氣付いたのか、嘉慶帝は次の如き上諭を發して、彼の奏請を擲還せしめた。曰く

「若し竟に督撫を稽查することを以て、之を學政に委ねれば、則ち學政の權、豈に督撫より重からずや(略中)前明巡按を設立し、最も有名無實と爲る。該給事の加銜を奏請するは豈に督撫の外に、又た一巡按を設くるには非らずや、」と。

さて次に學臣の教育と考試の權は督撫の管轄外にあつて干渉を受けず、嚴然として督撫の權限外に獨立していた。

即ち曰く

學政は敕を奉じて學校を專督す。督撫布按兩司は其の職掌を侵すことを許さず。

また曰く

學臣丁憂等の事もて離任するに遇有し、學政の印務を將て該督撫或は藩臬をして署理せしむる者は、定例として考試するを許さず。

しからば右の如き獨立性を保持していた學臣の考試は如何にして施行せられたのであろうか。清代、鄉會兩試の考官と肩を並べて、學臣は所謂「科舉の主腦」たるを自他とも

に許した。學臣がその品級の低さにも不拘、重視された所以のものは、實に科舉との關係に於て之を觀るのであつて、この點學臣の執行する三つの考試に就いて簡述する要がある。

學臣はその主要職務として任期三年の中に、管内の府州等を巡赴して院試・歲試・科試の三考を施行しなければならなかつた。院試とは府州縣學一綜括して儒學と稱するの入學試験の第三關門であつて、第一、縣試知縣が執行す、第二、府試知府が執行すに續いて學臣が執行官となりて行うもので、應試者童生は之をパスして始めて生員の肩書を賦與される。歲試とは生員の平素の勤惰を試めず定期試験であつて、日儒學教官の講書訓育を受くること稀れなりし生員も、義務として該試だけは必ず受くるを要した。學臣はその成績に依り、或は生員の階級を昇降し、或は中央國學に貢送する等のことを行う。歲試の答案は所定の批語を付して全部中央に解送すべきものとされた。最後に科試とは生員が郷試普通に科舉試の第一關門とすに赴かんとする時、その學力ありや否やを試めす言わば資格試験であつた。従つて歲試の如き生員必須の義務は無かつたが、一生涯生員の身分にて満足せる

場合は別として、誰しも郷試に登第して舉人となり、更に會試・殿試に合格して進士となることを念願する以上、科試も亦た甚だ重視された。科試の成績も中央に解送される。概ね學臣は郷試の年の秋を以て更替し十月末を到任の限とし、任地に至れば先きに十二月中に歲試を、次に科試を行うを定則とし、大清會典事例卷三六七、禮部學校、學政考覈の雍正元年の覆准によれば「定例として、歲科兩考は一年を限つて考究すべし」とある。而して三年内に報完すべきを同じく定例とした。²²⁾ 院試は隨時、其の間に執行しなければならぬ。

さて一般に科試以後の考試を科舉試、科試以前の考試を學校試と呼んで區別するが、²³⁾ 前者は應試者が試験地に集合し、後者は執行官（學臣）が試験地に出張する。かかる相違はあつても、兩者いずれも古典の教養を問うた點において、内容上、同巧異曲と言うべく、この點本質的な相違はなかつた。因つて兩者は宛然連續せる一系の試験を形成し、學校も士子進身の始と言われて學校試と科舉試との間に大きな輕重の差があつたとは考えられない。さればこそ清代に「學臣は郷試に監臨する

六部成語註解によれば、監臨とは試験を總監する官にして

督撫之ことを得ず」との定例が嚴存し、しかも之は遂に清と爲る一代を通じて動かし得なかつたが、にも不拘、學臣は「科舉の主腦なり」と言われて重要視されたのである。而して儒學の教官よりも學臣と生員との間に師生の關係を生じ、²⁴⁾ 將來科舉の進路に大なる影響をもつたことは、云うまでもない。

以上、序に代えて學臣と督撫、學臣と科舉との二つの關係を概略ながら説明すると共に、學臣職務の主要項に觸れたが、しかればそのような重要な役割を持つた學臣は如何なる官員より選ばれたか。それについて清國行政法第三卷に曰く、

翰林院カ明初以來官制上何等政治上ノ實權ナキニ不拘尙ホ隱然トシテ勢力ヲ維持シ官途出仕ノ者ニシテ該院ニ入ランコトヲ希望スルモノ多キハ畢竟科舉ノ主腦タル學政使及鄉會試ノ考官ハ主トシテ翰林諸官ヲ以テ之ニ充ツルガ爲メナリ

とあつて、學臣^{最も普遍的な正式稱呼は提督某省學政、略して學政という。その他、學差、視學、督學、提學、學院、學道等という。督學}が明初以來、主に翰林院の諸官員を以て補用したと言うが、少しく詳細に検討を加うれば、

實情は清代に於て、若干これと出入がある。康熙は順治と少しく異り、雍正は康熙と大きく相違している。殊に雍正帝はその雍正四年、祖宗以來の制を變じて一つの改革を學臣任用法の上に試み、且つ、それと關連して學臣制上の一連の新政策を實施したのである。小稿に於てはその動機と目的とを考察し、以て雍正帝の地方教學乃至科舉政策の方向を打診しようと思うのである。

二、順治・康熙年間の學臣任用法

順治時代の學臣は、主として殆ど各部の郎中及び監察御史を以てこれに任じた。清史稿職官志三に曰く

初め各省並びに、督學道を置き、按察使僉事の銜を繫く
原註、各部郎中の進士出身の者もて補用す 惟だ直隸は督學御史一人を差す
原註、天學政と稱す、順治十年改めて翰林編檢・中贊・讀講を用いて並び差す、乾隆以來多く卿貳を用う、江南江北は二人、原註、順治十年改めて翰林官を用う、明年僉事を仍用す、康熙元年省併して一と爲す、二十四年復た翰林官を用う
 (以下) 學院と稱す、順治七年一六五〇學道は部屬より考選するの制を定む
原註、内閣より吏禮二部と會考し、禮部は二人、戸兵刑工は各一人を選ぶ、十六年停む
 とあり、また大清會典事例卷三六六禮部學校設官に

順治の初、各省次を以て裁定し、提督順天學政一員、提

督江南江寧等處學政一員、蘇松等處學政一員を設く。河南、山東、山西、浙江、陝西、江西、湖南、湖北、福建、四川、廣東、廣西、貴州、雲南は按察司僉事・提調學政一員を設く。(略)十年。江南學政は分つて江安等處一員、淮揚等處一員(即ち江北)と爲す。

とあり、また皇朝文獻通考卷八十五職官九直省に、官員

臣等謹んで初制を按ずるに、直隸、江南は御史を差し、余省は専ら提學道一人を設く。こゝに江北を缺くは恐らく、先掲の清史稿に江北は康熙元年江南に併省さるとあるに由る。

と見える。右三文を綜合すれば直隸(順天)江南(蘇松、江寧、江安)江北(淮揚)には御史を差し他はみな各部の郎中に按察使僉事の銜を帶して學臣の任に當たらせ、前者を學院といい後者を學道と呼んだことを知る。ここに云う御史とは監察御史であることは言う迄もない。この場合學臣の稱呼は皇清奏議卷一「學政の六事を條陳す」(順治元年と書しあり)の奏請者曹溶の肩書に見ゆるが、それは「提督順天等處學政監察御史臣曹溶」とある。

次に直隸、江南、江北以外の河南以下の十四地方では各

部の郎中にして進士出身の者を補用し、按察使僉事を繫銜せしめたのは何に由來するのであろうか。思うに明代正統元年^{一四}_{三六}の制を沿襲したもののようである。

たとえば明會要^{四〇}_卷職官十二「提學」に

提學 原註、元は各行省に儒學提學司有り

正統元年^{一四}_{三六}五月、南京戸部尙書黃福言う、比來生員學藝疏淺なり。宜しく布政、按察二司をして、遍歴考試せしむべし。眞才を得るに庶からん、と。是に於いて兩畿及び十三布政司各々提督學校官一員を置き、兩畿は御史を以て、十三布政司は按察司僉事を以てす。著して令と爲す。

と見え、また、

明史^{卷六九}選舉志一に

正統元年始めて特に提學官を置き、専ら學政を提督せしむ。南北直隸は俱に御史を、各省は副使、僉事を參用すと記されている。従つて恐らく明制に準據したと推測されるのである。また先きの監察御史よりの學政任用も、右明史選舉志等の記載により、明代正統の制の襲用であつたことが判る。

ところで先きに掲げた清史稿の記載の最後に見える如く、順治七年^{一六}_{五〇}に至つて學道は悉く部屬即ち禮、戸、兵、刑、工の五部の官員いわゆる部曹から選ぶことになつた。内閣が吏禮二部と會考して決めるのである。その人數は禮部は二名他は各部一名ずつであつたという。^{但し十六年（一六五九）には停罷さる}

ところが更に順治十年^{一六}_{五三}に至れば、直隸、江南、江北では監察御史に代つて編修、檢討、中允、贊善、讀講を用ゐることになつたと先掲清史稿の割註に見えている。これに相當する記載は清朝實錄世祖章皇帝（即ち順治帝）^{卷七五}にあり。曰く、

順治十年^{一六}_{五三}癸巳五月丁丑、都察院左都御史金之俊奏言すらく、直隸、江南、江北の提學員缺は宜しく詞林を以て簡用すべし、と。之に従う。

言う迄もなく天子の御膝元たる直隸や、人文繁盛にして應試者衆多を以て聞ゆる江南、江北に對しては刑名按劾を專職とする監察御史の學臣よりも「儲才の地」と稱せられた翰林院の諸官、編修、檢討、讀講等を以て充てるを良策とする。中允、贊善は元來詹事府（東宮）の屬官であるが、翰林院讀講、編檢の銜を兼ねた。かかる見地から敢て品級

は低いが、詞林の官員が拔擢差遣されたのであろう。ただ、その事は短期間であつたようで、江南江北にては、「明年（十一年）僉事を仍用す」と先掲清史稿割註にあり、依つてただ、直隸だけが史料にあらわれた限りに於て、引續き翰林官を差したと見られる。

因みに、参考までに述べれば順治の初め、未だ學臣の制が無かつた創草の時期には、秀才即ち生員は各道の道臺によつて考取した。故に道考と言つた。と六部成語註解（補遺）に見えている。

要するに、順治年間は翰林官を學臣に充てゐることは直隸以外は僅かに江南江北に一年間だけ行われ、その他の地にはなかつたのであるが、それが少しく變化して長く浙江・江蘇にも翰林を用い、直隸と合せて三省に於て行われるようになるのは次の康熙帝の康熙二十三年^{一六八四}以後である。

清史稿職官志三に曰く、

〔康熙〕二十三年、督學の論俸補授の例を停む。並びに浙江は改めて翰林官を用うに定め、順天・江南北の例に依り、學院と稱し、其の各省の部屬道府より任ぜられし者は仍お學道と爲す。

とあり、次ぎに東華錄康熙卷三四によれば

康熙二十三年十二月丁未 吏部等の衙門、旨に遵つて會議すらく、學政は文教に關繫し、人材を造就す。嗣後、

其の論俸補授を停め、順天の學政缺は應に「翰林院」侍讀、侍講、諭德・洗馬^{諭洗は詹事府屬官}を將つて概ね開列を行い

簡用を恭請すべし。江南、浙江の學道缺は其の郎中、道府を補用することを停め、應に侍讀、侍講、諭德、洗馬、

中允、贊善を將つて亦た概ね開列を行い簡用を恭請すべし。其餘の各省學道缺は應升の進士出身の五部の郎中

及び參議^{布政使の屬官}、道、知府等の官を將つて選擇開列し、簡用を恭請すべし、と。之に従う。

とあり、清稗類鈔^{卷二七}爵秩類及郎潛紀聞初筆卷八に

國初提學道多く郎中を以て之に任じ、康熙の間、江浙兩省始めて改めて翰林官を用う。

と見え、皇朝通志^{卷六九}職官略、學政の條下「提督學政」の割註に

國初、各省督學道を設く。康熙二十三年、改めて京員を以て簡用す。

と見える。これ等に依れば、一、從來學臣任命が例として

論俸補授の形即ち上からの命により行われていたのを吏部による選擇開列を行い天子に簡用を恭請する形に改めたこと、二、直隸、浙江、江蘇の三省に於て學臣は翰林院の諸官を専ら主軸として任用する方法に改められたこと、三、從來は地方官（道臺、按察使僉事）が充用されたことがあつたが、京員を以て簡用欽派することにしたこと、以上の三つが康熙帝の康熙二十三年の新方策として開始されたのである。

しかるところ、康熙帝は更に康熙三十九年^{一七〇〇}に及びて、改めて各省の學道（即ち直隸、江蘇、浙江以外の學臣）も翰林官員を以て一併に差遣せんと意向をもつに至つた。しかし翰林院學士韓菼は、この意向に賛意を表しなかつたので、遂に之は實現せず、中間的な翰林と郎中との二本立ての任用制に落着いた。即ち清稗類抄^{卷二七}爵秩類「國初學政は翰林を差さず」なる文章に曰く、

康熙庚辰^{即ち三十九年}七月、内閣上諭を奉じたるに、各省學道、原と翰林官員を差遣せず。嗣後各省學道、宜しく翰林官員を將つて一併に差遣すべし。爾等、翰林院と會議具奏せよ、と。時に長洲韓文懿公菼方めて院事を掌り、議上

る。略に云う、翰林官朝夕文章を講習し、品誼を樹立し猶お以て萬一に補報するに足らず。今、學道一併に差遣せよの旨を奉ぜり。此れ固より不次の鴻恩なり。然れども諸臣中、有志有守の者、固より人に乏しからず。儻し一の未だ稱わざるもの有らば、ただに一己の面目の關する所のみならず、深く我が皇上格外擢用の意に負かんとを恐る。臣愚敢て差遣を輕議せず。

とあるのがそれである。右の結果として東華錄康熙卷六六によれば

〔康熙三十九年秋七月乙未〕上、又大學士等を顧みて曰く、^{（中略）}翰林官員は専ら文翰を司り、更に他事無し。各省學道の員缺は應に郎中と並び差すべし。任滿の日、仍お各々衙門に回らしめ、或は掣籤すべきや、或は何れの差遣をなすべきかは、爾等、翰林院と會同議奏せよ。

とあつて、康熙帝は學道の缺は翰林官員と郎中とをもつて並び差遣することを考へついた。ところがまたその結果として、同書同卷同月の乙巳の條には右の記載に引續き曰く乙巳、翰林院掌院學士法良・韓菼旨に遵いて議すらく、此の後、各省學道缺出すれば、翰林官内、侍讀侍講より

以下職名を開列して、欽點を仰候せしめんと。(中略)上曰

く、翰林官は學ぶ所、優長なり。朕之を悉知せり。但だ其の人と爲りは尙お未だ深悉せず、以て簡擇するに難し。

此の後、學道缺出すれば、告假在籍の月期は論ぜざるを除くの外、翰林の貧なる者を較俸派出せよ。云々

とある。

右の如くなれば康熙帝の方針として、三十九年以後、學臣は直隸・江南・浙江以外は翰林官員と、各部の郎中を以て並び差すことに定つた。既述の如く翰林官(編檢)の品級は低い。乾隆五十四年の上諭中に、學臣に任ぜられた徐立綱に對し「徐立綱は編修の微員を以て、朕が學臣に簡用するを經たり。更に當に如何にか感激、益々潔清に勵むべし云々」⁴⁹なる文句が見える。思うに清代にありては翰林院編修は先述の如く正七品、檢討は從七品であつた以上微員扱いにされても致し方がなかつた。郎潛紀聞の撰者同治の進士陳康祺は右の康熙三十九年の翰林官員を全面的に任用せんとする康熙帝の上諭をもつて破格なりと言ひ、この上諭に對する韓菼の「差遣を輕議せず云々」の奏を讀んで次の如く云つてゐる。

〔此を讀みて〕學政の一差はもと翰林の預るべき所に非ざるを知る。仁皇帝康熙帝即ち特に破格に之を參用す。今、毎に學政更換の期に屆りて、偶々一二他衙門の人員有り。翰林官多く以て分に非ずと爲す。風氣の變遷、此の如し。殊に詫かるべき也。

とある(郎潛紀聞卷三)。

三、雍正時代の學臣任用法等の改革

既述の如く學臣の缺出する場合、又は學政交代の期に吏部が翰林院の官員等につき、しかるべき者の姓名を開列して奏上し天子の欽點簡用を恭候することが康熙朝に始つてゐる。されば學臣たるものは「欽命に出ずるを以て儀は欽差に同じ」と云われた。⁵⁰また當時の人は學臣を指して

その職、典學に在りと雖も、篤節親ら持し、輶軒采風の責有り⁵¹

とも言つた。輶軒とは申す迄もなく、元來周漢の頃、天子の使臣の乗る輕車の意で漢代輶軒使を毎歲八月派遣し異代の方言を求めさせたと傳えられる。因つて後世、天子の使臣を輶軒使と言つたのである。畢竟清代の學臣は獨裁君主

の使臣として、各省に派遣され、士習文風の教化に當る最高責任があるとされたのである。

従つて天子の使臣たる學臣の人は選は特に慎重を要したが、雍正帝は特にそれに心を遣つたようで、彼は即位勿々上諭を發して次の如く學臣の遴選は充分慎重にすべきことを戒めている。

雍正元年、諭すらく、督學の一言は尤も人倫風化の繫る所なり。學臣を遴選するは倍加鄭重にすべし云々。⁸⁰

右の言葉に續いて、彼は學臣の任務の重大なるを説き、ことに學臣を繞る陋規、賄賂などの惡弊積久を一掃すべく、「私かに苞苴を納るること勿れ」⁸¹以下の八項目よりなる禁止條項——それは孰れも何々すること勿れの嚴しい表現をもつ——と學臣の胥吏、幕客についての注意事項二つを掲げて學臣をいましめた。尤も學臣のみ戒めたのではないが、右の如き上諭を特に發したのが即位勿々の雍正元年であつた點から見て、雍正帝の學臣に對する關心も頗る強いものがあることを思わしめるが、果して次々と學臣制に於ける改革や新政策を行つた。その一は學道の稱號を廢止し各省督學は全面的に學院と稱することにし、これ以後、多く翰

林官を以て充任する方針に改めたこと、而して部屬より簡用されるものは翰林編檢の銜を加えること、その二は學臣の學力試験の實施、その三は翰林院の實力試験^{大考と}の創置、その四は翰林官員の品級引上げ、その五は觀風整俗使の設置である。

先ずその一から述べよう。東華錄雍正^九 雍正四年十一月辛卯に

大學士等に諭すらく、各省の學政は士子を教導するの責有り。關係甚だ重し。乃ち向來定例として翰林科道より簡用さるるものは學院と爲し、部屬より簡用さるるものは學道と爲す。其の見任の職掌を論ぜず、但だ其の前任の官職を論ずるは、未だ允當ならざるに似たり。應にいかに畫一になすべきやの處は、著して會議具奏せよ、と。

尋いで議すらく、郎中等の官にして差を奉じて學を督する者は應に一體に學院と稱すべし。其の開缺を停め、各各原銜を以て學を督せしめ、差滿の後、仍お衙門に歸らしめて、事を辨ぜしめん、と。旨を得たり。凡そ郎中等の官にして差を奉じて學政を提督する者は、若し原缺另

補を行わざれば、恐らく、部中、事を辦するに人に乏しからん。議する所、未だ周詳ならず。朕意うに、凡そ部内の郎中等の官にして督學の任に膺るものは、則ち加うるに編修、檢討の銜を以てし、其の名と實とをして、相稱えしめん。伊れ任滿し考察の後を俟ちて、仍お本部に歸らしめて補用せん。此の如くせば、妥協と爲すに庶からん。九卿に著して定議具奏せよ、と。

ついで同卷同年十二月の條に

十二月乙亥、九卿旨に遵いて議覆すらく、部員の差を奉じて學を督するもの、員缺は另に銓補を行わん。其の加銜は、庶吉士散館授職の例に照し、該員の二甲進士出身に係る者は、加うるに編修の職銜を以てし、三甲同進士出身に係る者は、加うるに檢討の職銜を以てし、一體に稱して學院と爲さん。任滿すれば仍ち本部員の缺を俟ちて補用せん、と。之に従う。

と見えている。

因みに右の記事は大清會典事例^{卷三}禮部學校^{學校}設官^{設官}にも簡約して見ゆ。曰く、

〔雍正〕四年、定むらく、各省の學道は一體に改めて學

院と爲さん。部郎等の官にして差を提督學政に奉ずる者の如きは、均しく加うるに翰林院編修、檢討の職銜を以てせん。皇朝通志卷六九職官略「提督學政」下の割註略と同じ

この様にして、雍正四年以降は學道なる銜名は無くなり、すべて學院となつたわけであるが、實際上雍正四年以後、翰林をもつて任ずることが多くなつた。商衍礪もその「清代科舉考試述錄」^{第一章}に於て

是れ〔雍正四年〕より、多く翰林官員を以て〔學臣に〕

充任す云々

と言つている。

さて、「嘉道以前は部曹は翰林より重し」と言われたその時代の大勢の中で、雍正帝が部屬の任用から翰林官の任用へと切換えたことは英斷であると言わなければならぬ。

尤も直隸の如く一時乾隆二十四年以後、卿貳を用うることにした省もあるが、部曹より簡用される學臣は減少の歩を辿り續けたらしい。

同光兩朝、部曹にして學政を得る者無し。乾嘉以前、部郎を以て學を視る者、數を指す可からず。風氣の變遷、未だ何に繇るかを解せず。

右の傾向は言う迄もなく雍正四年を境としてその後次第に醸成されたのである。

因みに右は雍正四年の改革の次第であるが、しからばそれ以前即ち即位以降雍正四年までの雍正帝の方針はと言えば大體次の如くであつた。

朕即位の初、諸臣の才學品行に於て、未だ能く深知せず。以て旨を降して簡用するに難し。大學士尙書侍郎に著して、翰林、科道、部屬内に於て各々知る所に據つて、一

二員を保舉せしめ、開列して部に送らしめ、彙奏して旨

を請わしむ、皇朝文獻通考卷七一學校校九、直省鄉黨之學三

即ち右によれば翰林、科道、六科給事中、各部の各道御史、部屬官員等の中から大學士、尙書侍郎に命じて、熟知せる一二員を保舉せしめ、その姓名を並べ書いて吏部に送らしめ、彙奏の手續をふんで後天子の簡拔任用を待たすと言う方法であつた。

雍正帝第二の改革は應差の學臣の實力試驗實施である。こ

との次第は皇朝文獻通考卷六〇選舉考四考課、大清會典事例

卷三禮部學校學政、考覈、卷六東華錄雍正等に見ゆ。

東華錄によれば

雍正三年春正月甲子、吏部奏請すらく、湖南山東學政を

差さんことを。旨を得たり。従前學政、考を主る。皆其の人と爲り謹慎の者に就きて派往すれど、並つて未だ文藝を考試せず。其の中、竟に文を衡すること能わざる者有り。或は中式の後、荒疏年久しき故ならん。著して應差の翰林並びに進士出身の各部院の官員を將つて査奏せしめ、朕が試するに文藝を以てするを俟ちて、再た差委を行わん。

とあり、通考にはこれに續いて

三月に至りて太和殿に於て考試す

と見えている。かかる學臣の學力検査は史料にあらわれた限り、前にも後にも無く、全く雍正帝獨自の新方針であることを信ずる。而してこの學力検査の行われたのが雍正三年で、翰林官員をもつて學臣の主力とすることを決定した年(雍正四年)に先立つて實施されたところに大いに注意すべき點があり、即ち兩者は密接に關係ある政策であつて、學臣の向上を目的とした周到な用意であると思う。

雍正帝第三の改革は翰林官庶吉士等の學力試驗實施である。清稗類抄卷二一考試類に「翰林大考は雍正に始る」と題

した一文に曰く、

雍正癸丑〔十一年〕四月上諭すらく、嗣後、庶吉士等、經に授職して、或は數年以後、或は十年たりと雖も、朕再た考驗を加えん。若し依然として精熟ならば必ず優に従つて錄用し以て鼓勵を示さん。或は遺忘錯誤せば、亦必ず加うるに處分を以てせん、と。是れ翰林大考の始と爲す。

と。このように雍正帝は翰林官員をもつて學臣に任じ、その學臣の實力向上につとめるため、學臣を親試する制を開き、更に學臣の任に最も多く就く翰林官を「大考」する事を創めて、たえずその學力を保持せしめようとした。細心の周到な措置と云えよう。

雍正帝第四の改革は翰林官員の品級引上げである。單に翰林官や學臣の尻を叩くだけではなく、雍正帝は實質的に翰林官員の品級を引上げて地位を高めた。

即ち雍正帝は元來品級の低い翰林諸官の多くの品級を明代或は、清初に比して次の如く昇せている。即ち明史^{卷七}職官二翰林院の條、清史稿職官志二翰林院の條、皇朝通考卷七七職官考一によれば次の如くである。

掌院學士……順治元年正三品、

雍正八年從二品に陞す。

侍讀學士……明代は從五品、清初はそのまま、雍正三年從四品と定む。

侍講學士……明代は從五品、清初はそのまま、雍正三年從四品と定む。

侍讀……初制は正六品、雍正三年從五品に陞す。（光緒二十九年正五品に陞す。宣統元年正四品に陞す。）

侍講……初制は正六品、雍正三年從五品に陞す。（宣統元年從四品に陞す。）

修撰……初制は從六品、

編修……初制は正七品、

檢討……初制は從七品、

修撰より以下宣統元年並びに從五品に改む。

第五は觀風整俗使の設置である。雍正帝は浙江省に觀風整俗使を置き、土風の惡薄を訓飭匡正し教化を興行せんとした。

先ずその職掌について、硃批諭旨、浙江觀風整俗使蔡仕艮に曰く

臣〔觀風整俗使蔡仕拙〕衙門は文武官員を稽査するの責有り。³⁷⁾

とある。次にその設置の経緯の大略については東華錄雍正卷九によれば

〔雍正四年^{一七二六}冬十月〕甲子、九卿等に諭すらく、朕聞くに、浙省は風俗澆漓なること他省よりも甚し。力めて整頓挽回を爲さず、其の重罪に陷るに及びて、之に加うるに刑を以てするは實に忍びざる有り。朕意うに専ら一官を遣し、浙江省に前往せしめ、風俗を問ひ、奸偽を稽察せしめ、應に勸導すべき者は之を勸導し、應に懲治すべき者は之を懲治すべし。務めて紳衿士庶をして儆戒する所有らしめ、盡く浮薄巽陵の習を除き、謹厚に歸せしめ、以て一道同風の治を昭らかにせん。其の如何にか衙門を設立し、關防を鑄給すべきやの處は、著して詳議具奏せよ、と。尋いで議査すらく、唐の貞觀中、觀風整俗使を置き、天下を巡省せしめ、風俗の得失を觀しむ。今、官を遣はして、浙江省に前往せしめ、風俗を問ひ奸偽を稽察せしめん。應に授けて浙江等の處の觀風整俗使と爲し、關防を鑄給して以て職守を重くせん、と。之に従う。

光祿寺卿王國棟を以て浙江觀風整俗使と爲す。

とある。右中の「浙省の風俗澆漓」とは主として查嗣庭事件を指すことは、清稗類鈔^{卷二}一 考試類^{世宗復浙人鄉會試}

雍正丙午^{四年のこと} 世宗浙人查嗣庭、汪景祺の詩文悖逆、風氣惡薄なるを以て、是に於て詔して浙江の春秋の貢士を罷む。戊申、觀風整俗使を設けて以て之を訓う。

とある。

以上の如き經過経緯を以て浙江に觀風整俗使を置いたが、之と學臣と如何に關係するか、右の諸記載だけでは明らかでない。ところが續いて、廣東にも雍正七年に觀風整俗使を設けたたが、その時の事情が多分に學臣と關係あることを思わしめるのである。

大清會典事例^{卷三} 禮部學校^{學校} 設官 皇朝通考^{卷七} 學校考八直省鄉黨之學に見ゆ。

〔雍正七年〕廣東肇高學政を増設す。其れ教職士子は、觀風整俗使をして兼ねて稽察を行わしむ。^{以上の文字は會典事例には記されず、會典事例は内閣の二字を缺く} 廣東は盜案繁多にして民俗犷悍なり。應に觀風整俗使一員を設け、化導訓飭せば風俗人心漸く醇厚に歸すべし。又た該省督撫奏稱すらく、

粵東の士習未だ能く端謹ならず。請うらくは、學政二員を設け、一は文衡を司り、一は士行を飭さしめ、以て人材を造就するの地と爲さんと。朕思うに文と行とはもと相關するに屬す。離して二と爲す可らず。況や廣東は地方遼闊なり。若し司文司行、分れて兩員に屬さば、仍ち各々通省を遍歴するに、耳目の聞見恐らくは未だ周ねからざるもの有らん。著して學政兩員を設け、該省の地方を按じて考試督學と、廣東觀風整俗使に分管せしめ著して通省の教職士子は、其れをして概ね稽察を行わしめん、と。會典事例はこれに續いて廣東肇高學政、廣韶學政各々一員を設くとあり。

右の如き次第なれば本來學臣の行うべき地方學官教職や士子生員の督察即ち教化のことを、觀風整俗使にも行わしめようとする意圖が見える。

當時、學臣は愈々考試の任務に忙殺される傾向にあつたらしく、本來その任務の一として士習文風の振興までは手が廻らなくなつて來たらしい。雍正年間湖南布政使朱綱の言に曰く

臣思うに、民風の澆漓醇樸は全て士子の引誘倡率に在り。士習一たび端なれば、民風自ら厚からん。宜しく學臣を

責成すべきに似たり。但だ學臣は毎に閱文考試を以て重しと爲し、教官も亦た訓迪教育を以て具文と爲す。是を以て成效を見ざるなり。⁸⁸

朱綱によれば、地方教化の實の揚らないのは學臣がただ考試を行うことを以て能事了れりとするにあると言う。この傾向は科擧が空前の繁昌を見せるに伴い、顯著となつて來たようで、曾國藩も學臣が考試事務に精力を消耗し、餘力をもつて民を教化しようとするが、それでは成績をあげるに極めて困難だと歎いてゐる。即ち

彼の學政なる者は、一行省中に孤懸客寄す。守土する者、皆な貌敬し、而も之を神拒す。日ごとに文字に儻精し、機智を千百詭辨の場に角⁸⁹う。而して餘力を以て民に教うるに、仁義孝弟の經を以てせんと欲す。其れ亦た難しからずや。

と。是に依つて之を觀れば、順治の初は、監察御史又は按察使僉事等の按劾刑名を本務とする官員をもつて學臣の任に當らせたが、雍正帝に至つて、學術専門の翰林官員を用いることにした。ところが、學臣は考試事務繁忙を極めて次第に教化の面がお留守になつた。しかも翰林官は本來稽

察の官でない。そこで觀風整俗使を置き之をして民の教化を擔當させ、學臣の繁忙を助けると云う意圖ではなかつたかと思われる。

ただ、觀風整俗使は、福建にもおかれたが、ともにその後問もなく停罷された。⁹⁰

その時期と事情とは明らかにし得ないが、雍正時代に置かれた觀風整俗使の目的の一つは、略々明らかにし得たと思う。

以上、雍正治下の學臣制上の改革はいずれも彼獨自のもので、清一代を通じてまだ寡聞の精か、史料上、同種又は類似の政策がとられたのを外に見ない。とすれば、學臣の任用法を翰林一本槍にしたこと、その稱呼を學院の名で統一しようとしたことは清代でも最も獨裁的君主だった雍正帝の集權政策の片鱗と見るべく、その他の學臣と翰林官の實力試験の實施、觀風整俗使の設置は、之によつて、生童を中心とする地方讀書人即ち科甲の陋風を少しでも改善しようとの意圖の現れと見られる。殊に學臣は一省に於ける教化教育上の最高責任者であり、天子の使臣でもある。それに試験を課して學力を試めすならば、學臣と師生關係の

密接な全國の生童は必ずや襟を出して戒心し自ら正されることは、充分考えられてよいであろう。

註

- (1) 皇朝經世文編續編卷六五、曾國藩「江小帆の湖北に視學するを送るの序」
- (2) 大清會典事例卷三六七禮部學校、學政考覈、咸豐五年上諭
- (3) 硃批諭旨田文鏡八年六月二十二日
- (4) 東華錄雍正卷九雍正四年九月丁巳上諭及大清會典事例卷三六七禮部學校、學政考覈、咸豐七年上諭
- (5) 東華錄雍正卷九雍正四年九月丁巳上諭
- (6) (3)に同じ
- (7) 大清會典事例卷三六七禮部學校、學政考覈、嘉慶七年上諭
- (8) 皇朝文獻通考卷八九職官考十三によれば編修は正七品、檢討は從七品である。
- (9) 大清會典事例卷三六七禮部學校、學政考覈、咸豐五年上諭中の四川學政何紹基の上奏文
- (10) 六部成語註解頁一七
- (11) 清史稿職官志三に「提督學政各省一人」の下の割註に「各々原銜の品級を帶す」とあり。
- (12) 大清會典事例卷三六八禮部學校、學政關防、乾隆五十三年上諭
- (13) 右書同卷、道光八年上諭
- (14) 右書卷三六七禮部學校、學政考覈、嘉慶七年上諭
- (15) 大清會典事例卷三六七禮部學校、學政考覈、咸豐五年上諭

①⑥ (7)に同じ

①⑦ (7)に同じ

①⑧ 大清會典事例卷三六八、禮部學校、學政關防、順治九年題准

①⑨ 大清會典事例卷三六七、禮部學校、學政考覈、康熙五十年覆准

②① 清國行政法第三卷第九章教育第二節科舉第六項迴避及關防〔備考〕四九一頁

②② 清稗類鈔卷二一考試類「歲考卷の批語」に曰く、生員の歲考卷は俱に須らく部に解すべし。一定の批語有り、其の一等の者は批して清通と曰い、二等の者は批して平通と曰い、三等の者は批して亦た通ずと曰う。

②③ 大清會典事例卷三六七、禮部學校、學政考覈、順治九年の條及び康熙二年の題准によれば限内に完結出来ない場合は、一級を降して調用することになつてゐる。

②④ 宮崎市定博士「科舉」頁五四

②⑤ 清稗類鈔卷二一考試類

②⑥ (20)に同じ

②⑦ (20)に同じ

②⑧ 清稗類鈔卷二七爵秩類「翰林院」

②⑨ 皇朝通志卷六四、職官略、一、詹事府、詹事、滿洲漢人各一人。

漢詹事は翰林侍讀學士の銜を兼ね。少詹事、滿洲漢人各一人。

漢少詹事は翰林侍讀學士の銜を兼ね。左春坊左庶子左中允左贊善は滿洲各一人漢人各一人。右春坊の各官と記注纂修の事を掌り、翰林讀講〔即ち侍讀・侍講〕編檢〔即ち編修・檢討〕の銜を分ち兼ね。

②⑩ 大清會典事例卷三六八、禮部學校、學政關防

③① ②④の「道考院考」

③② 郎潛紀聞(二筆)卷二

③③ 大清會典事例卷三六七、禮部學校、學政考覈

③④ 同右「私に苞苴を納ること勿れ」「情面に瞻徇すること勿れ」「武途を輕視すること勿れ」「濫りに祠廡を取ること勿れ」

「矯激にして沽名すること勿れ」

「昏庸にして事を廢すること勿れ」

「卑汙にして貶節すること勿れ」「驕暴人を陵すること勿れ」

「胥吏は必ず關防を謹むべし」「幕客は尤も宜しく選擇すべし」

③⑤ 清稗類鈔卷二七爵秩類

③⑥ 清史稿職官志三「惟だ直隸は督學御史一人を差す」の下の割註

③⑦ 清稗類鈔卷二七爵秩類「部曹視學」

③⑧ 硃批諭旨、浙江觀風整俗使蔡仕鼎雍正七年正月二十五日

③⑨ 右書、湖南布政使朱綱雍正四年十一月十七日

④① 皇朝經世文編續編卷六五、禮政五、曾國藩の「江小帆の湖北に視學するを送るの序」

④② 皇朝文獻通考卷七七職官考一

The Real State of the Local Administration in the Yung-chêng 雍正 Period

Ichisada Miyazaki

It has been known that the Yung-chêng emperor paid special attention to the local administration and adopted some new policies for it. Here the author asks what degree the emperor's intentions were realized. He tries to offer an answer through analysing Lan Ting-yüan 藍鼎元's Lu-chou-kung-an 鹿州公案, i.e. the original records of the struggle against the interrupters of his administration when he was Chih-hsien 知縣 at P'u-ning and Chao-yang prefecture, Chao-chou-fu 潮州府, Kuang-tung 廣東 province. Most disturbances were arose from the activities of Shu-li 胥吏, Tu-hao 土豪, Wo-tao 窩盜 and Sung-shih 訟師. In spite of victory over them, he was removed from his post because of his chief's unreasonable hatred. However the emperor did not leave such a talented officer to suffer unjustly. Later he was restored his honor and promoted to Chih-fu 知府. The author concludes from the above story that the emperor's efforts for the local administration had actual results in practice.

Government School Inspectors 學臣 in the Yung-chêng Period

Toshikazu Araki

The most important duties of government school inspectors were to give some of the government examinations and to preside over all educational affairs in every province. Even the provincial governor could not interfere with their rights of examination and education, because they were dispatched by the emperor.

The Ch'ing-kuo-hsing-chêng-fa 清國行政法 vol. 3, (p. 491) explains that they were generally selected from among officials of the Han-lin Academy. But at the beginning of the Ch'ing dynasty [i.e. in the reigns of Shun-chih 順治 and K'ang-hsi 康熙], officials of the Han-lin Academy were seldom appointed to the post, and the local officials were often selected. In 1727, the Yung-chêng emperor decided to select them chiefly from among officials of the Han-lin Academy, in order to centralize provincial rights of education. In fact, the reign of the emperor was a transition from the political system of the Manchus to that of modern Chinese despotism.